

回 答：中里 滋 樹（沢内病院歯科）

保健婦の村民に対する食生活指導がかなり行きわたっているため、砂糖の摂取制限等はある程度意識が高いと思われる。

質 問：甘利 英 一（小児歯科）

1 学童期の Brushing をどの様に指導しているか。また今後どのように Brushing 指導の改善をしていく予定か。

2 修学前の齲蝕罹患状態はどのようであったか。これと学童期の変化を対比してみると良いと思われるが。

回 答：中里 滋 樹（沢内病院歯科）

現在学童の低学年はローリングが仲々出来ないため、横みがきを主体とし、高学年に対してはローリングを主体とした指導を行なっている。

学童を対象に Brushing 指導をした場合第一大臼歯の咬合面及び頬面が仲々磨けていないため、今後この点に注意して指導する所である。

#### 演題11 Riga—Fede 病の2症例

○佐々木 哲正, 小野寺 満, 越前 和俊,  
関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

私達は最近、Riga—Fede 病の2症例を経験したので報告した。

症例1：6カ月の男児で舌下部の腫瘍を主訴として来院した。口腔内所見では舌下面正中部に直径約15mmで表面は黄白色の苔に被われた円形な潰瘍がみられた。下顎乳中切歯が両側とも歯冠、約 $\frac{1}{2}$ まで萌出し、その切縁は尖鋭で一歯がやや舌側に傾斜していた。初診時当日にその尖鋭な切縁を唇舌的にわずかに削合し軟骨を投薬したところ1週間後には潰瘍は約 $\frac{1}{2}$ の大きさに縮小し、約3週間後は消失した。

症例2：8カ月女児で舌下部の潰瘍を主訴として来院した。口腔内所見は舌小帯より右側舌下面部にかけて8mm×4mmの楕円形で境界明瞭な腫瘍が存在し、表面は灰石色でやや扁平に隆起していた。下顎乳中切歯が両側とも歯冠、約 $\frac{1}{2}$ まで萌出し、舌小帯の短縮がみられ舌運動が制限されていた。舌小帯伸展術と腫瘍の切除を予定していたが、乳中切歯の萌出ともなつて腫瘍の縮少傾向がみられ、約1カ月後には $\frac{1}{2}$ 以下になり、3カ月後にはほとんど完全に消失した。

本症の誘発原因としては、第1例では歯牙萌出異常と萌出開始時期が生後4カ月頃と少し早期であったこと、第2例では舌小帯の短縮が推定できるが、原因を除去することにより、いずれも歯牙を保存しつつ治癒するに至った。

質 問：千葉 清（第1口外）

① 症例2にて Riga—Fede 病の臨床診断後、舌小帯伸展術と腫瘍切除をえたとのことですが、第一義的に腫瘍切除を考えた判断基準は。

回 答：佐々木 哲正（第2口外）

舌小帯強直症を伴っていたことと、来院までの経過より治癒し難いように思われたためである。

質 問：高木 知道（第2口解）

御発表の疾病の頻度はどの程度なのでしょう。下顎切歯切端の刺激から生ずるとすれば、そのような例はきわめて頻繁に見られると思うのですがいかがでしょうか。

回 答：佐々木 哲正（第2口外）

本疾患の詳細な頻度についての報告はみあたりませんでした。本疾患はなんらかの誘因があるときに発症すると思われ、日常の臨床において、そう頻繁にみられるものではおられません。

質 問：甘利 英 一（小児歯科）

小児の食生活状態、とくに哺乳状態はどの様であったか、また、それに対して何か改善を試みたか。

回 答：佐々木 哲正（第2口外）

2症例ともすでに離乳は開始されておりました。

回 答：関山 三郎（第2口外）

本疾患は原因を除去すると急速に縮少することが多いので、食生活の指導が必須とは考えていない。

#### 演題12 破折歯の統計的観察

○松丸 健三郎, 遠藤 修, 関 重道

岩手医科大学歯学部附属病院予診室

歯の破折にともなつておこる一連の症状は、split-root syndrome, または、cracked tooth-syndromeなどと総称されている。

演者の1人である松丸は、昨年10月の第20回秋期日本歯周病学会において、「歯の破折によっておこった歯肉の疼痛および咬合痛を主訴とした3例」を報告した。

今回は、破折歯について、年齢、性、歯種、充填物